

入選まであと一步!

夏井いつき

◆佳作への道

具体例を挙げた質問の比率が増えてきたこと、嬉しく受けとめています。俳句には基本の型や定石の技法等がありますが、十七音の短詩なので一句一句が独自のバランスをもつて成立することも多いのです。

ですから、毎回寄せられる類似質問「三段切れはダメだと教えられました。三段切れの句が評価されるのに違和感をもつのですが」「助詞の使い方が分かりません。助詞は一個だけが良いのでしょうか」等にお答えしたところで、本当の意味での回答にはならないのです。本欄は「佳作への道」という非常に具体的なテーマが与えられていますので、質問についても具体例を添えて下さいとお願いし続けています。

まずは、兼題「光」を詠んだ二句についての質問を

「さのひかり」とゆつたり使ったほうが、清々しい調べが作れるのではないのでしょうか。

次の質問は、こんな句です。

しはぶきに赤光の射す聴診器 清水縞午

『や』にすると重たい気がするし、『を』とするとぼやけてしまいそうで」と、上五の助詞を迷っておられます。上五の助詞「に」が的確かどうかというのが作者の質問ですが、この一句で何を伝えたいかについてのコメントはありませんので、推測するしかありません。添削とは、作者が表現したい内容に言葉を寄せていく作業。作者の意図ありきなのです。

「しはぶき」は咳。冬の季語です。「赤光」は、赤色の光ですが、特に夕方の太陽の赤い光を指します。「射す」はサ行四段活用なので、「射す」＝終止形で意味が切れているとも、「射す」＝連体形が下五「聴診器」に繋がることも読めます。

言葉を押さえた上で直訳すると、『しはぶき』によって「赤光が射す聴診器」という意味になるのかな？

しはぶきや赤光の射す聴診器

しはぶきを赤光の射す聴診器

取り上げてみます。

朝光の漉き込んでおり水面鏡 石川治

『朝光の』としましたが、やはり『朝光を』とすべきでしょうかとの質問です。コメント中に「やはり」とありますから、作者がこの一句で伝えたいのは以下のような内容だと思われます。「朝の光を漉き込んでいる水面鏡（鏡のように凍っている水面）だよ」。

ならば、上五の助詞は「を」になりますね。もし「の」にしたいのならば「朝光の漉き込まれおり」となります。つまり、上五の助詞問題は、中七の複合動詞を「漉き込む」とするか「漉き込まれる」とするか、そちらの選択と連動しているということです。

この齟齬以外に、私が気になったのは「朝光」という言葉の選択です。（読み方を調べると「あさかげ」「ちようこう」と二つありました）

中七を「漉き込んでおり」と冗長に描写してしまったので、上五の音数が苦しくなり、結果的に「朝光」を選んだのではないかと推測します。

【添削例】水面鏡あさのひかりを漉き込んで

季語「水面鏡」を活かすことを考えると、むしろ「あ

作者は、上五を「や」にすると強すぎるかと迷い、『を』だと光景がぼやけると悩んでいるのです。なぜ上五「を」という選択肢がでてきたのだろうか……と、あれこれ考えているうちに、ひよつとして作者は以下のような光景を描こうとしたのではないかと、思い始めました。「夕暮れの赤い光が差し込んでくる診察室。往診ならば患者宅の病間。聴診器を当てようとすると、病人は咳き込む。聴診器にも、咳によつて上下する胸にも夕映えが及んでいる」。

だとすれば、一句の構造そのものを考え直したほうがわかりやすくなります。

【添削例】赤光や咳く胸へ聴診器

【添削例】赤光や咳く胸に聴診器

このように描いたほうが、季語「咳く」が明確に見えてくるのではないのでしょうか。

中七「へ」は、胸へ向かって聴診器を当てようとしている映像、「に」は聴診器が胸に当てられている映像ですね。ささやかな違いですが、聴診器を当てられる「胸」の表情が微妙に違ってきます。